世界バレエフェスティバル スター・インタビュー／Wとじこみポスター

平成3年8月24日第3種郵便物認可　平成30年11月1日発行（毎月1回1日発行）第28巻第11号

# DANCE MAGAZINE

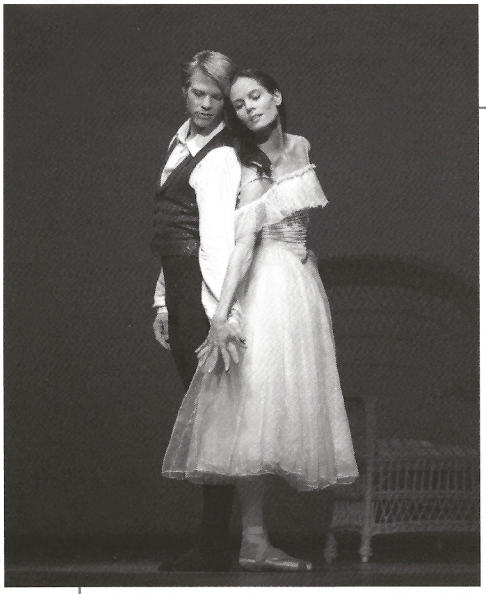
ダンスマガジン

NOVEMBER 2018
1500YEN
11

ダンスマガジン・インタビュー
マチアス・エイマン

総力レポート
## 世界バレエフェスティバル
THE 15TH WORLD BALLET FESTIVAL

SHINSHOKAN



「椿姫」イゴーネ・ド・ヨング、マライン・ラドマーカー　©Angela Sterling

## マライン・ラドマーカー引退
### Marijn Rademaker ends his dancing career

オランダ国立バレエのプリンシパル、マライン・ラドマーカーが、9月16日、舞台に別れを告げた。ラドマーカーはこの数年、慢性的な膝の負傷に苦しんでおり、この夏の世界バレエフェスティバルも直前に出演を断念したばかりだった。8月24日にダンサー引退を発表。今後はバレエ団でアシスタント・バレエ・マスターとして後進の指導に当たるという。

「慢性的な膝の怪我のため、こんなに早く踊るのを止めるのはもちろん本当に残念です。しかし、ぼくは長く、素晴らしいキャリアを送ることができたし、誇りと喜びをもって振り返ることができます。いまは先に進むときです。アシスタント・バレエ・マスターとして、自分の経験を伝えていけることをうれしく思います」

と、ラドマーカー。

9月16日の「ニュークラシックス」公演の後、彼はノイマイヤー『椿姫』第2幕のパ・ド・ドゥをイゴーネ・ド・ヨングと踊り、ノイマイヤー、芸術監督テッド・ブランドセン、ハンス・ファン・マーネンのビデオ・メッセージが流された。その後ふたたび舞台に現れたラドマーカーに観客から盛大な拍手が贈られた。

# Performing Arts News WORLD

## イリ・ブベニチェク、「わが祖国」をプラハで上演
### Jiří Bubeníček's "Ma Vlast"

かつて存在した2つの国を記念するために、ユニークな行事が催された。プラハのアドリアナ・クルナーチョヴァー市長からイリ・ブベニチェクに与えられた任務は、チェコスロヴァキア建国100周年を称えるバレエを作るように、というものだった。ブベニチェクはベドリフ・スメタナの愛国主義的な作品「わが祖国」に振付けることにした。ボヘミアの伝説と風景に着想を得て書かれた、全6曲から成る交響詩である。

「わが祖国」を舞踊作品にした振付家はブベニチェクが3人目だ。6月27日、ブベニチェク版の世界初演は、プラハの旧市街広場で上演されるという好機に恵まれた。これほど目的に合致する場所で披露された作品はないだろう。

第1曲「ヴィシェフラト（高い城）」はボヘミアの古代王族が題材の曲だ。王族を演じたのは、スウェーデン・ロイヤル・バレエのアーセン・メラビアンと佐々晴香。ミステリアスな日本人バレリーナは、ヴルタヴァ川沿いの土地を指してプラハ建設を予言した、美しさと知恵をあわせもつ王妃リブシェを踊った。

「ヴルタヴァ（モルダウ）」は「わが祖国」の第2曲であり、全6曲のなかでももっとも知られている曲である。美しい旋律が描写するのは、蛇行する川の流れだ。水を思わせる流れるような青緑の衣裳をまとった水の精役の女性ダンサーたちに誘われるようにして、イシュトヴァン・シモン（ドルトムント・バレエ）とアリーナ・ナヌ（チェコ国立バレエ）が詩的で情感あふれる結婚のデュエットを披露した。

第3曲は英雄的な女性戦士を描いた「シャールカ」。ボヘミアの伝説「乙女戦争」の中心人物だ。ラファエーリ・ケロイスのカリスマ漂う演技を通じ、シャールカは自らを木に縛り付けて囮となり、騎士ツチラトをおびき寄せる。ザルツブルク州立劇場バレエのフラヴィオ・サラマンカが気品ある勇士役を務めた。反乱を起こした女性たちに捕われたふりをしつつ、縛めを解かれると、シャールカはツチラトとともにパ・ド・ドゥを踊る。

第4曲「ボヘミアの森と草原から」では、場所の感覚が戻ってきた。ブベニチェクによるアンサンブルの振付には、スメタナが自然にヒントを得たアイディアが盛り込まれていた。その流れのまま、最後から2番目の曲「ターボル」に入ると、作品と旧市街広場のつながりが投げかける、他では見られない痛ましさが浮き彫りになっていった。

「ターボル」のテーマはフス派戦争、そして殉教者ヤン・フスだ。ステージの後ろにはフスの巨大な記念像が立っている。1415年に異端者として火刑に処されて以来、フスはボヘミアにおいて、圧制と戦う反体制派の力を象徴する存在となった。赤い光に包まれるフスの彫像のかたわらで、フス派の人々を演じるダンサーたちは地に倒れ、神聖ローマ帝国軍によって虐殺されゆくさまを表現した。

最終曲「ブラニーク」には、ボヘミアの偉大なスピリットが一気に注ぎ込まれた。ブラニークは山の名で、なかには聖ヴァーツラフ率いる数多の騎士が眠っており、ボヘミアがふたたび彼らを必要とするときを待っていると言われる。ブベニチェクはこの最終部を幾重もの群舞で埋め、最後は出演者全員が手をつないで1つの円を描きながら回るという演出で締めくくった。上演終了後のダンサーは観客に向かってお辞儀をするだけでなく、後ろを振り返ってフスにも敬意を捧げていた。

（Graham Watts　訳・藤沢祥子）

「我が祖国」（ブベニチェク振付）
©Serghei Gherciu